

ワイマールへの旅

—— 1941年11月第1回ヨーロッパ作家会議についての覚え書き

有 田 英 也

はじめに

『ジャン＝ジャック・ルソー』の著者ジャン・ゲーノーが、占領下のパリで綴った『暗い歳月の日記』から、1941年10月31日の一節を引こう。

「作家の威信とは、すこぶるフランス的な事象だったと思われる。世界中どこの国の作家も、あれほど民衆からの尊敬に包まれなかった。フランスのブルジョワは、息子が芸術家になるのは危惧したかもしれないが、こぞって芸術家と作家とに、神聖とも言うべき優越性を認めた。作家が祭司を自任できたのは、フランスにおいてだけである。

今日の文学者たちは、この伝統による敬意をなおも享受している。だが、もはや明らかに彼らにはそんな値打ちはない。たいがいはい売文業者にすぎない。だが、他人から尊敬され、虚栄心が肥大しすぎた彼らは、国の悲惨と隷属とを超越したつもりで、神がみのように、無責任ですませられると考えている。こうして目につくのは、ゲッペルスの監視下で商売を営む姿だ。彼らの小商い、彼らの神事。それは誰にも止めさせられまい。昨今の取引きでは、商品にヒトラーの小旗を立てるのが決まりだとしても、それが彼らのせいだろうか。御飯を食べなくちゃね、と言う者がいる。もっとも誠実な者たちだ。また多少うろたえながら、わたしたちの傑作が、フランスの復讐の先駆けになるのさ、と言う者も。そして、もっとも冷笑的な手合いは、進んで新作を新色に染めあげる。

かつてはフランスでは誰もが、作者であれ読者であれ、思想を信じていた。この信仰こそが、フランスだった。この頃は、もう誰もそれを信じなくなった。まだ結論には早いと思うが……⁽¹⁾」

両次大戦間には平和主義者として活躍し、人民戦線に共鳴したゲーノーは、リセ（高等中学）の学生言葉でカーニュと呼ばれるノルマル（高等師範学校）文科への受験準備学級で教えていた。戦前のリセの教員の若い世代への影響力は、哲学者アランの活躍からも推し量れよう。左翼の知識人としての政治的立場を、自ら主宰する『ウーロッパ』誌や『ヴァンドルディ』誌で明らかにしたゲーノーは、いわばサルトルが戦後に理論化する以前に、そしてシャルル・ペギーがドレフュス事件をきっかけに体現したような意味で、「^{アンガジェ}参加する」作家だったのである。ところが1939年秋から翌年5月にかけての「奇妙な戦争」の後に、ベルギーの中立を侵犯し、フランドルから電撃作戦でフランスを侵攻したドイツに、フランス軍はわずか六週間で潰走し、ペタン元帥を新しい国家元首とするエタ・フランセが、第三共和国憲法を停止した。ゲーノーは占領されたパリにとどまってリセの仕事を続け、文章の発表を自らに禁じて日記を綴った。

戦前のゲーノーは、この「伝統による敬意」を享受したはずであり、いまだ国家主義に引き裂かれるヨーロッパで平和を訴えた姿には、予言者ともかく祭司の面影はあったろう。したがって、「進んで新作を新色に染めあげる」対独協力作家たちへの批判は、誤った思想を広めていることに對してではなく、「作家の威信」を悪用すること、それもすべてを承知のうえで「冷笑的」に、「ナチのおえらがたはこれがお好きでね」といった具合に媚びてみせることに向けられている。ゲーノーの日記には、作家の日記にありがちな読書の感想が多いが、これは占領の事実を忘れるためではない。戦前からの論敵ドリユウ・ラ・ロシエルの編集する、対独協力的な『新フランス評論』誌は毎号、出るとすぐに読んで論評していた。たとえばドイツとの戦争で右手を失ったばかりのアルマン・プチジャンが、「前哨戦」と題した文章で、若い頃のモンテルランとドリユウを思わせる

英雄待望論を吐露したときは、これを戒めている。ドリュウの評論集、無条件反戦を貫いてゲーノーと訣別したジオノの評論集にも、目を通して反論している⁽²⁾。

ゲーノーは、思想への信頼を自分も失うことに抵抗して、占領と協力と戦局とを思考しようとしている。このゲーノーの日記に感じられるのは、戦後の協力作家追及に見られた断罪でも、その後の慎重な名誉回復でもない。彼がおそらく「冷笑的」な範疇に入れたであろう才能ある対独協力作家たちが、彼ら自身、協力をどう思考し、決断したのかを、深く理解しようとする意志である。本論で、彼らのワイマールへの旅を、思考において跡づけるゆえんである。

1 ワイマール作家会議の評価

ワイマール作家会議は、ゲッペルス宣伝省の企画による。パリのいわゆる親仏的ナチを媒介として、ドリュウやシャルドンヌなどすでに協力政策への文化面での参加を表明していた作家を中心に、協力作家を集め、ドイツ、旧オーストリアに招待し、ここにミュージック・ホールの芸人(「芸術家」)、彫刻家、画家を交えて、新しいヨーロッパ文化の創造を訴えた⁽³⁾。モーツァルト没後150周年記念祭も併催された。一行の写真とニュース映画は各地で公開され、協力の事実が宣伝された。参加したフランス人のうち、自殺したドリュウや、自首して刑死したブラジャックなどを除けば、ほぼ誰もが会議に出席したこと、ひいては占領軍への協力的態度一般を、戦後に釈明している。例えば戦後に死刑宣告され、翌年に恩赦されたリュシアン・ルバテは、1942年の代表作『瓦礫』の続編ともいえる『あるファシストの回想』(1976年没後刊)で、参加の動機をこう記し

ている。「最初は、書きかけの原稿を二週間遅らせるのが少し不安だった。だが、プログラムを読んだら、そんなもの吹き飛んでしまった⁽⁴⁾。」しかしルバテの回想は、音楽好きゆえの過ちといった音色ではない。ロシアでの劣勢を否定するゲッペルス演説、オーストリア大管区指導官バルデュール・フォン・シーラッハの晩餐会を冷静に観察しており、後に見るジュアンドーが、両者に幻惑されたように回想するのと比べて、知り尽くしてあえて対独協力したルバテの立場が問われよう。釈明の是非をめぐっては、サルトルが『文学とは何か』で議論の手続きを提出し、批評家エチャンブルはもっと直截に「コラボ〔対独協力者〕に裁きを⁽⁵⁾」(1952)で弾劾、その後もさまざまな論議があった。1981年に、一方の当事者である検閲官を勤めた元ナチ将校ゲルハルト・ヘラーの回想が出版された時にも、マスコミは呪わしい過去再来におおいに沸いたようだが、すでに『協力者たち』(1976)の著者で戦後生まれの歴史家オリーなど、かつてのレジスタンス対コラボという構図とは異なる観点から問題提起をする人々も増えてきていた。それを要約するなら、対独協力におけるナチの強制を認めながらも、ヴィシー政権の裁量を重視し、したがって協力の犠牲者に対しても、フランス人全体の責任の自覚を求める立場といえよう。筆者も、国家レベルの協力の有無を論じる資格は自分にはないと断ったうえで、個々の協力者の置かれた状況を検討すべきであるという、その考えに同意する。

もちろん、これに激しく抵抗する人々がいる。彼らにとって協力とは、一部のフランス人が、ナチに買収されたか、人民戦線時代の怨恨からか、あるいは単にプロパガンダに騙されたために犯した、あくまで個人的な誤謬にすぎない。さらに、この種の考え方によれば、ある時期にペタン元帥のヴィシー政権を支持するのは、むしろ普通のことであり、引き際を心得るのが肝要になる。ルイ・マルは映画『さようなら子供達』の中で、この

種のいわば穏健な責任回避を描いた。工場主を夫に持つカンタン夫人が、息子たちとレストランで食事中に、「もうペタン主義者なんていないわ」と軽口を叩くのは、被害者のユダヤ人を取り巻く1944年の身勝手なフランス人の一つの典型である。また、自殺したドリュウ・ラ・ロシェルや、敗走するドイツ軍とともにジークマリンゲンに逃げなかったブラジャックを、愚かなのか誠実なのかはともかく、すべてが分かった時点であえて「徹底派」を貫いた知識人の行動と称える風潮もある。だからこそ、ドリュウに『新フランス評論』誌の編集を任せたガリマール社は、あえて1992年にドリュウの占領下の『日記』を出版して、真実に照らして協力者を判断させ、同時にガリマール社の責任をも社会に問うたのである⁽⁶⁾。このように、議論の高まりと資料の公開があってはじめて、占領下の文化協力の内実も明らかになる。

2 ワイマールからの報告——マルセル・ジュアンドーの場合

ワイマール会議を含む文化協力を知るうえで、ドイツ側の資料を駆使したロワゾーの研究書は必須である。だが、会議への出席者が、帰国後に発表した文章からは、ドリュウ・ラ・ロシェルが『新フランス評論』1942年1月号に載せた「ヨーロッパ的ドイツ」が漏れている。この評論を念頭におきながら、やはり同誌の41年12月号に掲載されたマルセル・ジュアンドーの「証言」をもとに、協力作家がドイツで何を見てきたかを考えよう。

この二人の作家は占領下に日記を綴っており、その中で占領と協力の意味をしばしば問うている。彼らが出版を意識して日記を執筆し、推敲したことは、本文から明瞭に読み取れる。したがって、彼らの日記は、市民の

記録というにとどまらず、対独協力に手を染めた作家が、同国人に申し開きをする場でもあったはずである。

残念なことに、ドリュウの『日記』には、パリを離れてワイマール作家会議に出席した期間の記述が、1941年11月12日の「ドイツへの旅、ワイマール、ベルリン。10月末」以外にはない⁽⁷⁾。しばしば『日記』の紛失を懸念し、占領軍の不興をかって検閲された評論も平気で書く彼であってみれば、旅行中はスパイ活動を恐れて執筆を慎んだと推測されよう。

一方、ジュアンドーの『占領下日記』では、この旅行の記述は、「この時期に関わる書類、メモ帳、日記は、ヴェロニクが燃やしてしまったので、記憶をたよりに、ドイツに赴いた事情を記そう⁽⁸⁾」とただし書きされているように、戦後のものである。それ以外の『占領下日記』の叙述にも、編者の指摘するように、事後の知識がなければ書けない事柄がさしこまれている箇所があり、誠実に日記を公開したとは言えない。

日記の叙述を修正して自己弁護するジュアンドーの態度は、たしかに卑怯である。だが、筆者はこれを改竄^{かいざん}とはみなさない。修正の事実は、かなりはっきりと叙述から読み取れるからである。むしろ、自己弁護の論理と修辞に寄り添う、いくつかの傾向を注目すべきである。それが占領中と戦後とで変わらないとすれば、ジュアンドーに変更不要と判断せしめたのは、どのような思想の磁場なのだろうか。

戦後に改めて記したワイマール作家会議にまつわる一節には、派遣団への参加を自己弁護した箇所がある。「こんな時期に、敵国のいることの弁護を、正当化を試みずにいられようか」と述べるジュアンドーは、自分が「三十歳のとき以来、パリに暮らしてはいるものの、パリジャンにもコスモポリタンにもならなかった」と書く。「中央山塊〔マッシフ・セントラル〕の地方人であり農民のまま」の彼は、今日ドイツで、かつてなくフラ

ンス人だと自覚している、とも書く⁽⁹⁾。つまり、ファシスト・ドイツや反ユダヤ政策を断行するナチス・ドイツに共感するインテリではない、と強調する。これは、ファシストのインテリが、共產主義者を外国の手先とみなし、コスモポリタンと蔑^{さげす}んでいたことを想起させるだけでなく、ドレフュス事件当時の反ドレフュス派のモーラスやバレスが、ドレフュス派を「外国人の党派」と罵倒したことに通じよう。モーラスの政治学の特徴は、1937年刊の『わが政治思想』⁽¹⁰⁾に顕著な、権力の正統性としての「自然さ」であった。ドレフュス事件においても、ドレフュスの有罪は、フランス人ならば自然にわかる、と考えた。ここに、19世紀末の社会思想に負の刻印を残したソルボンヌ高等学院教授ジュール・スーリの「心理学的遺伝」という概念が見える。モーラスとは反ドレフュス派の盟友だったモーリス・バレスは、『ナショナリズムの情景と教義』(1902)を書くにあたってスーリから多大な影響を受けたとステルネルは指摘しているが⁽¹¹⁾、それはテーヌのいわゆる「種族・環境・史的契機」の三要素を批判的に発展させる意義を持っていたのである。モーラスの唱えた「自然な」政治の根ざす正統性とは、このように抑圧的な民族排外主義と文化的保守主義だったとひとまず言えよう。ただし、モーラスの独創は、王党派としての彼が、遺伝に根ざす正統な権力として国王を想定しながらも、現実のフランス共和国のナショナリズムを擁護するという離れ業をやったのけたことにある。そのため、モーラスにあっては、「合法的な国」と「現実の国」の二重性の相貌のうちに、祖国フランスが現前することになった。現実の国家を承認する理性と、何が正統な国家かを生得的に知り、事に及んで直観する感性との二重性が、モーラス思想の根幹をなしている。ジュアンドーの強調する「農民」もまた、モーラスを経てヴィシー政権のスローガン「大地は偽らない」に通底する、「自然な」判断の正統性、したがってその無責任

性を主張するものである。「農民」と自己規定するジュアンドーは謙遜しているのではなく、自然さという根拠に立てこもっている。ここから、一時の過ちを、身体的な判断が補填する論理が生じる。

彼は「生涯で書いた政治評論は、ただの一本（その後の二、三本は無価値と思う）で、しかも周囲の猛反対を押しきる頑固さと勇気があったので、出版できたのだ⁽¹²⁾」と書く。「頑固さと勇気」を、農民のインテリに対する優越と読ませたいのだろう。

また『占領下日記』の、戦後の修正が明示されていない部分に、反ユダヤ文書は、「ユダヤ人に媚びさえすれば勲章も、ボロい仕事も望むまま」だった人民戦線時代に発表され、彼らが迫害されだした1939年からは「著作目録から抹消させた⁽¹³⁾」とある。ここは自己弁護であるから、ジュアンドーにとって、反ユダヤ感情を抱くことは、それだけでは悪を構成せず、その感情の表出が実際にユダヤ人に危害を与えるときに、自己を抑制できれば弁明になるのだとわかる。したがって、ワイマール旅行の（再構成された）日記に戻れば、「この宣言文〔前述の政治評論、実は反ユダヤ主義的な攻撃文〕に憎しみがなかったのと同様に、わたしが今日、派遣団に参加したのも、誰かに反対したわけではない。目的は和解と友情に尽きるのだ。もし、わたしのドイツ旅行のうちに、ユダヤ人問題をめぐるわたしの考察との関係を見ようとするなら、それはまったく筋違いだ」と、「ユダヤ人問題」の関与を否定する。それでは、戦後のジュアンドーに無害だと感じられた論拠とは何かといえ、⁽¹⁴⁾「わたしはただ、このことによって、一人のフランス人が必ずしもドイツ嫌いではないことを、たとえ今の状況においてさえそうなのだと証明しようとしている。一步進んでわたしは、自分の肉体をドイツとわたしたちの友愛の架け橋にできたら、と願う⁽¹⁴⁾」。これは、ジュアンドー自身が書き記した講演者の「近づく

ヨーロッパの婚姻の、今夜は婚約式なのです⁽¹⁵⁾」という言葉の繰り返しに他ならない。つまり、自分は騙されていた、と述べる伏線になる。

ナチ占領下のパリで、1942年7月16日から翌日にかけて、婦女子を含む多数のユダヤ人が、居所から強制的に逮捕され冬季競輪場に収容された。ユダヤ人迫害の事実は、ここに明らかになった。この事件前後の叙述を、ジュアンドーの『占領下日記』に探してみると、1942年8月22日の日付で、妻カリアシスが所有し、夫婦で住んでいたパリの建物に、ドイツの警察がユダヤ人を逮捕に来た情景がある⁽¹⁶⁾。被害者の一人バッヘラッハについて、「さらばココ、連れ去られて再び戻ることのない自動車の窓から、彼はそう叫んだ」(傍線引用者)と記すとき、語り手は連行後の運命を知っているのだ。詩人マックス・ジャコブが収容所で死んだことに責任はない、というほぼ同時期の記述に、編者はジャコブの死は1944年なので、ここは後から書き加えたのだと注記しているが⁽¹⁷⁾、すでに叙述そのものが事後性を物語っている。ココとは、このユダヤ人の肉屋が愛人にして連れ歩いていた18歳のフランス娘のことだが、ユダヤ人の好色、ハイヤーのヴィクトリア馬車で外出する気取り、配給時代の肉屋つまりヤミ取り引きへの暗示など、かりにこれがバッヘラッハの日常の活写であっても、当時の反ユダヤ主義宣伝の常套の出現には驚かされる。もう一人の犠牲者は、数か国語に堪能で、ドイツ人にも言葉を教えていたシェーンシュタット嬢であるが、逮捕されて自動車を待つあいだ、彼女はひっきりなしの冗談の合間にロシア語の綴りを一文字ずつ挟みこみ、警官の頭越しに暗号めいたメッセージを近所のF夫人に残した。ジュアンドーは「[F夫人を] 危険にさらして」と書いている。淡々とした叙述にユダヤ人への同情はなく、むしろ住居、というより不動産に面倒を持ちこまれたことで、前述の反ユダヤ感情の正当化さえ感じられる。

このように戦後の書き直しの跡を検討することで、ジュアンドーが何を懸念し、自分がどう見られるのを恐れていたかが読み取れる。彼は自分の反ユダヤ思想を、彼が同胞と思う人たちに受け入れられる形にしたかったのであり、それを逸脱する事実、例えば人種政策を推進する敵国ドイツへの旅によって反ユダヤ主義を貫いたという解釈は、排除しておきたかったのである。なおジュアンドーのこの偽善的な態度は、ワイマール会議に同行した主催者側のヘラーの回想によって辛辣に批評されている⁽¹⁸⁾。

それではジュアンドーが、ワイマールから帰国直後に『新フランス評論』に書いた「証言」という文章では、旅の意味はどう解釈されていたのだろうか。ひとまず占領当時の出版物が、どういう経緯で店頭に並んだかを略述しよう。

3 占領下の出版事情

ドイツ占領下のフランス出版人組合は、1940年9月28日に占領軍当局と協定を結んだ。その全文は、検閲官ゲルハルト・ヘラーが1981年に出版した回想に収められている⁽¹⁹⁾。これによると、リヨンなど非占領地域に移らなかった出版社（そこではヴィシー政権が検閲した）は、出版前に自主的に作品を検閲することになっていた。言い換えれば、出版物は検閲の爪痕を残さずに市場に出回ったのである。

より具体的に言えば、出版が見送られるのは、公然にせよ隠然にせよドイツの威信と利益を損なうおそれのある書物とドイツ本国で発禁になっている書物である。その判断が難しい場合は、宣伝梯隊の著作物班で検討された。宣伝梯隊はまた、独自の調査と検討をもとに「駐仏ドイツ軍司令部の名において」検閲を行った。占領当局は紙を配給で押さえていたので、

検閲は効果的に働いた。なぜなら出版社にとって、疑わしい思想ばかりを活字にするのでは商売にならないからである。

ドイツにとって好ましくない書物は、ヘラーの回想に前文が収録された「オットー・リスト」に挙げられている。これは協定と同時に発表され、842人の「ユダヤ」および「反独」作家と、2千点以上もの書物を列挙し、書店からの回収を求めた。リストは1942年7月と43年5月に更新された。

これに加えて、占領当局が、ユダヤ人を経営陣から追放して「アーリア化」したカルマン＝レヴィ社のような例もある。7出版社と21書店がアーリア化され、ドゥノエルなど2社の財政が握られた⁽²⁰⁾。またヴィシー政権は、1940年10月3日の法令で、ユダヤ人が「新聞・雑誌・通信社・定期刊行物の社長、支配人、編集長を務めることを、厳密に科学的な出版物を除いて禁止」した。また翌41年7月18日の法令では、許可無くベタン元帥の写真や絵などを公開するには、事前に検閲が必要になった⁽²¹⁾。

以上は制約から見た検閲だが、ナチは反ユダヤ主義や、ドイツを盟主とする新ヨーロッパの建設を唱え、またフランスの退廃は戦前の政治指導者たちのせいだと宣伝した。複雑な組織系統を、ドイツ側の資料を用いて整理したロワゾーの研究によれば、宣伝を担当していたのは宣伝局とドイツ大使館、およびドイツ研究所である。

まず宣伝局だが、それ自体は国防軍に属したものの、ゲッベルスの宣伝省との関係もあり、ロワゾーによれば「宣伝局は、ベルリンの宣伝省の中継所の役をしていた」⁽²²⁾。前記の宣伝梯隊は宣伝局の部隊であり、フランスにはパリ、サン＝ジェルマン、ディジョン、アンジェ、ボルドー、そして全面占領された1942年11月からはリヨンにも置かれた。任務によって六班(Gruppe)に分かれ、それぞれ報道・ラジオ・映画・文化(音楽・美術・演劇)、そして先程の出版人組合との協定にあった「著作物班」

(Schrifttum) が検閲、最後の班が直接的なプロパガンダを行った。

またドイツ大使館は、大使館とはいっても正確には駐仏ドイツ軍司令官と接触するのであり、フランス政府と外交関係を結んではない。1930年代から独仏文化親善を推進していたオットー・アベッツが大使になり、カール・エプティングのドイツ研究所とともに文化活動を行った。その内実とは例えば、エプティング所長の深く関与したらしいカルマン＝レヴィ社のアーリア化である。また研究所はドイツ語書籍のフランス語訳に熱心で、次長のブレーマーは1942年から刊行された研究所の雑誌『フランスードイツ』で、1940年1月からの一年間に40点のドイツ書籍を翻訳させたと述べている。

禁止と表裏一体の奨励の側面は、協力作家の育成にはっきりと現れている。1941年2月に宣伝局は職員に、フランス出版社400社がカード化されており、出版の内容とドイツ当局との関係を追跡するよう指示した⁽²³⁾。宣伝局の職員は同年7月に1073人を数えており、たとえ著作物班はその一部だとしても、調査と指導は体系的だったと思われる。すでにアベッツ大使の肝いりで、40年12月からは『新フランス評論』誌が、ドリュウ・ラ・ロシェルを編集長に復刊していた。そして41年4月、カルチュ・ラタンに「リーヴ・ゴーシュ書店」(俗にドイツ書店)が店開きし、6月に宣伝局は奨励すべき作家のリストアップを始めた。これは、禁止のオットー・リストに対する「奨励すべき文学の総合リスト」となる。ロワゾーの研究書巻末には、その写真版が載っている。リーヴ・ゴーシュ書店の経営にはバルデッシュ兄弟があたり、占領軍の寵愛を得た作家がサイン会などを開いた。

だが、リストよりもはるかに有効だったと思われるのは、ドイツ資本を入れていたドゥノエルや、シャルドンヌが経営参加していたストックのみ

ならず、ガリマール、グラッセ、フラマリオンなどの老舗を含む計14社と宣伝局が協力して作ったカタログ「本の鏡 1941—1942」である⁽²⁴⁾。1941年11月、宣伝局の資料に計画が記載されたこのカタログは、17ページの光沢紙に、20人のドイツ人を含む90人の著作を紹介した。奨励されるべき作家の「リスト」と共通する作家は6人いる。そのうち、ドリュウとシャルドンヌは41年11月のワイマール作家会議に出席し、ポール・モラン、ピエール・ブノワとモンテルランは辞退した。一方、ヘラーに推薦され、実際にワイマールに赴いたブラジャックはシャルドンヌとともにカタログに写真入りで紹介されている。他の出席者でいえば、マルセル・ジュアンドーとアンドレ・フェノーは「リスト」には漏れていたが、カタログには入っている。ジュアンドーが辞退者を埋めるための追加だったことは、ヘラーの回想でも、ロワゾーの紹介する宣伝局内部資料でも分かるが⁽²⁵⁾、このことは本人が戦後に書き直した（これは明言されている）ワイマール旅行日誌でも触れられている。戦前から『新フランス評論』の敏腕な文芸評論家で、1938年にドリュウとともにドリオのフランス人民党に入党したラモン・フェルナンデスも追加である。宣伝局がリストとカタログで広範に協力作家を挙げる一方で、名士を絞りこんでいるのがわかる。

名士の周囲には、ナチが掌握した新聞・雑誌の編集者や記者がいた。ドリュウやフェルナンデスは、ナチの保護を受けていたシャトーブリアン『ジェルブ』誌やドリオの『レマンシパシオン・ナショナル』誌では、文芸雑誌『新フランス評論』とは異なる激烈な対独協力論を展開した⁽²⁶⁾。ゲーノーのように、占領下のバリで、読むことだけを自らに課した作家には、協力作家のシニズムが手に取るように見えたはずである。

このように、1941年11月のワイマールでの第一回ヨーロッパ作家会議は、独仏文化協力の見せ掛けのピークで演出された。

もちろん、41年6月の独ソ開戦にともない、ぜひともフランスを待機状態にとどめておきたかったはずのドイツにとり、文化協力のような生温い政策の占める割合は、ごくわずかであったろう。同年12月7日（日本時間8日）の日米開戦、また、翌年11月初旬の連合軍の北アフリカ上陸にともなうフランス全土の占領が、協力派と抵抗派の双方に与えた影響を考えれば、41年11月のワイマル作家会議が、その後もフランスの将来にとって、なんらかの意義を持ち続けると考えられる人々は少数だったろう⁽²⁷⁾。さらに、文化政策に熱心なドイツ人は、ナチ党員といえども軍から不審の目で見られかねなかった。事実、アベッツは42年11月から翌年12月までベルリンに召喚され、ドイツ研究所次長ブレーマーは東部戦線に送られ戦死した。だが、作家たちの思想にとっては、41年11月の選択は、彼らにもまた戦後のフランス文学にも、きわめて重要な事件であった。

4 ジュアンドーの「証言」

当事者ではない筆者が、レジスタンスなり、汚名を着た自殺者なりに感情移入して、生き延びたシャルドンヌやジュアンドーの戦中と戦後の文章を突き合わせてあれこれ書くのは避けるべきだろう。それよりも、協力作家において、その協力への意思が、彼の内的な欲求とどう関り、当時の状況にどう誘導されていたかを検証したい。

ジュアンドーは「証言」で、ドイツの若い詩人ハンス・バウマンを「自分のみならず祖国の友人」と称え、「実母の祖国と、生涯で二度までも武器を交えた悲劇」を語ったハイデルベルク市長を忘れがたく思い出すなど、ナチの文化協力政策に合致した感想を記している⁽²⁸⁾。また、「わたしは規律のよい民族を見た。そして、奴隷だとの噂に反して、わたしは自由な

人々を見ている⁽²⁹⁾」と述べるジュアンドーは、全体主義国家における自由を、全体の調和を乱さず、むしろ増進させる行動と規定する。ここには、農民の直観というよりも、個人主義による私益の追求をフランスの退廃と敗北の原因と見るヴィシー政権流のプロパガンダが見て取れる。『占領下日記』でも、ハイデルベルク市長の口からフランス再建への勧めが説かれており、それは「苦痛こそ、自己を知り完成させる唯一の道だ」というエックハルトの言葉に尽くされる⁽³⁰⁾。引用は「証言」と『占領下日記』でやや異なるが、これはジュアンドーの新プラトン主義的神秘主義好みというより、「改悛^{かいしゅん}」をスローガンの一つに挙げたヴィシー政権との連続性を示すものである。

一方、詩人バウマンについては、「わたしとフランス人同胞を救ってくれたので、今頃は身が危うくなっているだろう」と述べており、会議の表向きの目標だった「ヨーロッパ作家」の意識が、ドイツの手本によって形成されつつあるのがわかる。『占領下日記』で、頭文字だけ H. B. と記され、ハイデルベルクの他、フランクフルト、フライブルク、ヴィーンなどでも叙述のある「若い」ドイツ人との交友が、この詩人に該当するようだが、なぜ「証言」で彼の安否が気遣われたのかは、記事を読むかぎりでは釈然としない。たしかにフランス人派遣団に敵意をあらわにしたデンマーク作家とおぼしき人物やフランドル作家と比べて、この若い詩人が好もしかったのは理解できるが、ここには同性愛者であるジュアンドーの個性も考えねばなるまい。ヴィーンで、ナチス・ドイツに併合され大管区となったオーストリアの指導官バルデュール・フォン・シーラッハの豪華な晩餐会に招待されたときは、ジュアンドーは主催者の一人ゲルハルト・ヘラー（『占領下日記』では X とだけ記されている）と、この若い詩人に挟まれ、シーラッハの正面の席を貰った。これはヘラーの計らいだったとジュアン

ドーは書いている⁽³¹⁾。いや、Xの計らいである。ヘラーはH. 中尉⁽³²⁾とも書かれているので、読者にはXがナチ検閲官のことだとは容易に分からない。晩餐会の描写は、かつては会食者に枢機卿や王族しかいなかったはずの「ハプスブルク家の行列」にいるつもりで、夢見心地である。これがジュアンドーの幻惑におおいにあずかり、帰国後は、お気に入りの青年詩人の身を案じたのだろう。

幻惑はジュアンドーの旅を理解する鍵である。『占領下日記』に見えるジュアンドーは、「フランス最大の出版人の一人⁽³³⁾」と呼ぶ団長格のシャルドンヌと終始、行動をともにしており、また叙述が随所にあるカール・ロッテは、のちに「ヨーロッパ作家連盟」の書記を務める幹部である⁽³⁴⁾。この連盟はシャルドンヌが発案し、ハンス・カロッサが議長に選ばれた。代役とはいえ、彼は同行したR. F. (ラモン・フェルナンデス)を見下せると自負しており、ブラジャックは無視された。ドリユウ・ラ・ロシェルは、「ドリユウがそこにいた、わたしの側に」の一行だけである。これら三人の参加者は、フランス解放時にはそれぞれ病没、刑死、自殺して鬼籍にあった。ワイマールへの旅を回想するジュアンドーにとり、代表団の多くは後方に退いていた。つまり『占領下日記』は、ワイマールへの旅を、若く格式あるドイツ（シーラッハは33歳の貴族、バウマンは東部戦線から戻ったばかりの軍服姿だった）に魅せられる自分を主人公にした一つの物語として見せる。だからこそワイマール会議の公式行事であるレセプション、観劇を済ませての宴会で、J. K. (ヘラーによればスイス人参加者⁽³⁵⁾) が乾杯のさいに、「フランス万歳」とは言えないので、ただ「フランス」とだけ言ったとき、ドリユウが「わたしの側に」いるのに気づいたのである。周囲の人物は点景であり、ジュアンドーにとって重要なのは、「敵からこのような賛辞を得るのは、わたしたちにも、敵である彼

らにも、等しく名誉であり、わたしたちの友人たちを嫉妬させるのだ。わたしは、その厚い信義を、一瞬たりとも疑う必要はなかった」という感想なのである⁽³⁶⁾。これは占領下に公にした「証言」の論調に合致する。全体にジュアンドーの回想は、「証言」でも『占領下日記』でも、ナチの工作に乗せられて幻惑された様子を、臆面もなく言葉にしている。一方、反ユダヤ思想を隠蔽する『占領下日記』を合わせ読めば、そこにユダヤ人の顔のないことが、ドイツの青年詩人の存在とあわせて、幻惑の必要条件であると思われる。

〔付記〕 わたしは三年前に成城大学に着任した。その年の秋頃、ヨーロッパ文化学科の研究発表会で、フランス語で引用したハイデガーの用語の原語について、濱川祥枝先生から質問され冷や汗をかいた。成瀬治先生、黒崎宏先生からも、ご指摘をいくつか頂き、生きた心地がしなかった。だが、これでわたしは皮剥けたらしく、最近ではツラの皮は厚くなるばかり。ついに、ドイツ語が読めないなりに、独仏協力をテーマに書いてしまったのが本論である。ご寛恕をお願いします。

〔注〕

- (1) Jean GUEHENNO: *Journal des années noires*, 1947, 《folio》, pp. 205-6.
- (2) *Ibid.* p. 183, p. 216, p. 246.
- (3) Michel C. CONE: *Artists under Vichy*, Princeton Univ. Press, New Jersey, 1992, pp. 155-158. 画家・彫刻家については「旅行目的はどうも不明瞭」としている。p. 157. Gilles RAGACHE, Jean-Robert RAGACHE: *La vie quotidienne des écrivains et des ar-*

- tistes sous l'Occupation 1940-1944*, Hachette, 1988, pp. 156-161.
芸能人の場合, 「捕虜のフランス人慰問の側面もあった」。p. 156.
- (4) Lucien REBATET: *Mémoires d'un fasciste II 1941-1947*, Pauvert, 1976, p. 40.
- (5) ETIEMBLE: 《Justice pour les collabos》 in *Littérature dégagée 1942-1952*, Gallimard, 1952, pp. 161-178. 初出は『レ・タン・モデルヌ』誌 1952 年 6・7 月号
- (6) DRIEU LA ROCHELLE: *Journal 1939-1945*, Gallimard, 1992.
ピエール・ノラの序文参照。またほぼ同時に出版された次の研究も重要。Pierre HEBEY: *La Nouvelle Revue Française des années sombres 1940-1941*, Gallimard, 1992.
- (7) *Journal*, p. 276.
- (8) Marcel JOUHANDEAU: *Journal sous l'Occupation, suivi de la Courbe de nos angoisses*, Gallimard, 1980, p. 79.
- (9) *Ibid.* p. 84.
- (10) Charles MAURRAS: *Mes idées politiques*, Fayard, 1937.
- (11) Zeev STERNHELL: *Maurice Barrès et le nationalisme français*, Editions Complexe, 1985, p. 259. 初版は 1972 年。
- (12) Jouhandeau, op. cit., p. 84.
- (13) *Ibid.* p. 154.
- (14) *Ibid.* p. 84.
- (15) *Ibid.* p. 82.
- (16) *Ibid.* pp. 154-158.
- (17) *Ibid.* p. 154.
- (18) Gerhard HELLER: *Un Allemand à Paris*, Seuil, 1981, pp. 77-78. 『占領下のパリ文化人 反ナチ検閲官ヘラーの記録』大久保敏彦訳, 白水社, 1983, pp. 91-93.
- (19) *Ibid.* p. 213-215. 翻訳 pp. 260-263.
- (20) Gerard LOISEAUX: *La littérature de la défaite et de la collaboration*, Publications de la Sorbonne, 1984, p. 82; Pascal ORY: *Les collaborateurs 1940-1944*, Seuil, 1976, p. 154.
- (21) Dominique REMY: *Les lois de Vichy*, Romillat, 1992.
- (22) Loiseaux, p. 58.

- (23) *Ibid.* p. 87.
- (24) *Ibid.* p. 91.
- (25) *Ibid.* p. 102; Heller, op. cit., 《les rencontres européennes de Weimar》
- (26) Hebey, pp. 327-331.
- (27) ゲーノーの日記にワイマール会議の記述はない。
- (28) Jouhandeau: 《Témoignage》 in NRF, déc. 1941, pp. 649-651.
- (29) *Ibid.* p. 649.
- (30) *Journal*, p. 95; 《Témoignage》 p. 650.
- (31) *Ibid.* p. 115.
- (32) *Ibid.* p. 80.
- (33) *Id.*
- (34) Loiseaux, p. 103; Heller, p. 84.
- (35) *Journal*, p. 124; Heller, p. 86.
- (36) *Id.* 同行したヘラーの観察は手厳しい。pp. 70-72.